

世界改造に關する國字問題

田 中 館 愛 橘

今日は記念すべき 皇太后陛下の記念祭でありまして、此日に於て一席の講演を致す事は誠に名譽の至りで御座ります。申すまでもなく我が帝室に於かれましては、先帝 今帝に於かせられましても、國民の教育といふことには深く御心を留めさせられまして、總ての國民に教育の普及する様に毎度御獎勵のあつたことであります。之に就きましては數ならぬ私共も及ばすながら大御心に副ひ奉りたいと心配致して居ります。只今では色々な社會改良とか世界改造とか申すことが、何處でも稱へられて居ります。それに就きましても最も大切なのは普通教育であります。或人の見る所によりますれば過激運動のやうなことは獨逸では結局起るまい、英吉利でも佛蘭西でも到底過激的の運動は成功すまい、と云ふのは何だぞと申しますと、此等諸國では教育が普及して居る、故に社會が結局どうなるかといふこと——社會の各階級の關係が能く徹底して國民一般の思想に理解をされて居る故に、結局左様な過激なる運動は成功すまいといふことであります。私も多少其感が無いではございませぬ。要するに國民教育の普及は社會の

一番大きな問題になつて来る。

平和會議最中に巴里で御承知の如く支那人とかその外の國々の運動も盛でありました、或日の新聞に「亞米利加の學者が出まして遼東半島問題の講演をする、就ては何人と雖も之に趣味の有る人は聽いて呉れ」と云ふことが出て居ました。これは亞米利加の學生俱樂部で出征をして居ります所の色々な團體の人々及學生教育家等が立て、居ります俱樂部に於て一席の講演をするのでありましたから、私も聽きに參りました。參りますといふと何れも皆カーキ色の服を着て居る、婦人も居りますが、背廣の黒服は唯私一人でありました、短時間の間に東洋の關係を取纏めて述べましたが其要領は次の通りであります。

日清戦争から引續いて三國干渉の問題、此三國干渉があつたが故に日露戦争が必然の結果にして出來た。日露戦争といふのは諸君はどう見られるか知らぬが世界の大事件である、何を大事件といふかと言へば、日露戦争までは世界は總て歐米の白色人種の配下に在るものだ、白色人種の計画に依つて總ての殖民なり開拓を行つて行くべきもの、要するに世界は白色人の世界であるといふことは動かされ無い事實であつた。所が日露戦争なるものは東洋の黄色人種の一たる所の日本が武器を採つて、而も歐米に於て強兵國として恐れて居つた所の露西亞に向つて鐵砲を向けた、是は世界始まつてからの大事件であるといふのであります。それから引續きまして露西亞の支那に行つた關係、それから日露戦争の景況を述べまして、東洋の事情を知らんと欲すれば先づ此等の事を能く呑込んで置かなければならぬといふやうな

大體の事を申しました、其後で更に支那側から廻つて來た所の書面についてのべました、それは可なり長い出版物である、それに依れば今度の條約で青島は原案の通りに行くといふ日本の所有に歸するといふことになる、抑々膠州灣なるものは平たく言へば獨逸の掠奪泥棒主義で、宣教師二名を餌に使つて支那より強奪した所の土地である、宣教師を殺したに就ては償金も出さう遺族の慰勞金も出さう記念事業も起さうといふやうな低頭平身した謝罪も聽入れず、武力を以て之に向ふといふことになつて支那から取つたのである。而して米國の大統領ウヰルソンともあらう者が眞向に人道を振擧して此事件の結末を着けやうと云ふのに、斯の如き泥棒の後繼者を置く、我が聯合國の一たる日本に泥棒の後繼をさせようといふのは何處から見ても聞えない、かういふ趣意である、書類の詳しきことは茲に出て居るから一應見よといふことでありました、そこで話が濟みまして階段を降り掛けますと、後から幹事が來まして、「あなたは今本から御出でのやうですがどうか一同の希望であるが一言何か願ひたい」と斯ういふことであります、「それは私には出來兼ねます」とも言ひ兼ねまして、「左様ですか、それは御厚意誠に有難い」と云つて立戻りまして一座の講演をいたしました。私如き者の話を諸君の御聴きになりたいといふ御希望に對しては滿腔の感謝を述べます。さて私は自分を此處で諸君に御紹介するのでありますが、私は物理學の教授であり、而も今は引退したる所の老人でありますから、不肖にして政治宗教の事は全く知らない、只今のやうな趣味のあることに就ては全く意見を申上げることはない、併ながら今東洋問題に

關して伺つたに就て一つ申上げたいことがある、是は私の豫てからの希望する問題であつて、東洋の事情を諸君が立入つて御調べにならう、東洋の事情を窺はうとするならば、先以て東洋の文學を御承知になることを私は非常に希望する所である、處が不幸にして支那の文學は非常に六ヶしい、そして、其歴史は四千年以上遡つて居る形象文字で書いてある、形象文字は歐米の人は極めて野蠻的の幼稚の文字と解釋するのであるが、成程其初めは形象に依つて物を表はす、子供が手眞似をして表はすやうなものであつたが、段々進んで形象を漢字にし、結合して一種の國字を作出して其數五萬三千餘のものになつて居る。英吉利人の立派な文學者の書いたものでも其使つて居る言葉を勘定すれば一萬とか二萬位に過ぎない、それを如何ぞ五萬三千餘の文字を用ゐて、かく之を齟齬しなければならぬ、是は支那に取つては今日非常なる打撃となつて居る、例へば支那人が此文字を以て電報を打たうとします、かりに百字の電報を打たうとすると各字を決められた數字番號に直す、即ち此五萬何千の物に番號がついて居る、それを字引で引出す、それで百字の電報を翻譯する爲に二時間かゝる、是は支那の文部省の役人の揚やんといふ人が巴里に居りまして色々佛蘭西のアカデミーのことを調べて行きたいといふので一日、寄りまして話した時の實際の話である、百字の文字を電報文に直すに二時間かゝる、二時間もかゝれば今飛行機で飛んで行けば大阪まで行つてしまふ、さういふ文字を使用して居る、であるから支那の文字は非常に發達したもものには違ひない、今迄の支那には詩人と云ひ文士と云ひ立派な人がある、あるけれども文字を國民

教育の機關として見ると憐むべきものである、支那文字は極端なアリストクラチックのものである、決して低い文字でないが極めて小數の上流の學者社會に行はれるものであつて、文を一つ書いて石にでも彫ると云ふ人は數へる程である、之を以て日々之用便をしようといふことは以ての外である。そこで日本に歸つて見るといふと御承知の如く古へ支那文字を輸入して居る、支那文字を輸入したのであります、是だけでは日本でどうしても通用は出來ない、通用の出來ないといふことは日本の文法が違ふ、日本の國語の組立てが違つて居る、支那の國語と日本の國語とは素質が違つて居るから其儘ではどうしても通らぬ、極く簡單な例を取つて申しても、御寺の前へ行つて見ると石に不許葦酒入山門と刻つてあります、當前に讀めば「葦酒山門に入ること許さぬ」と讀むけれども、あの讀方が四通りか五通りある、極く簡單に「葦を許さぬれば酒山門に入る」或は「許さぬるも葦酒山門に入る」も讀める、でさういふものは論語などを讀みますと澤山あります、即ち厩焚子退朝問傷人乎不問馬「人を傷りたりやと問うて馬を問はず」聖人ともあらう者が厩の焚けた所に來て馬のことは一向構はぬといふ、さういふことはない、さう讀むのぢやない、「人を傷りたりや否やと問うて馬を問ふ」と不の字は上へ附けて讀むのだといふ、又朝聞道夕死可矣「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と讀むのと、「朝に道を聞けば夕に死するも可なり」と讀む人もある、どちらにも讀める。私も昔は丁ン髻を着けて居りまして色々講釋を聽かされましたが、幾ら支那人に依つても解釋の仕方がある、さういふことは英語とても日本語とても無いではない

が、日本の言葉でちやんと語格を正しく書きましたものは斯様なものは少い、絶対に無いではないが、支那とは比較にならぬ程である。そこで昔の人が言靈の幸はふ國にして直言の國であると言ひまして、漢文を讀む爲にはどうしても送りが假名が必要であつた。

今日の假名なるものは送假名の變形である、吾々の先輩の此假名の發明といふものは日本語の發展上非常なる貢獻をしたのである、殊に日本語の發展を通して日本文明に貢獻したることは測り知るべからざるものである、今日弘法大師が居られたならば爵位を贈らうと勳章を贈らうと逆も値踏たじまは出來まいと思ひます。但し假名の發明といふものは大師一人の御發明とは見られぬやうでありまして、此會のやうな文士の居られる處で申すのは愚でありますが、漢字を崩して段々々々數十年を経て現今のやうな形に進化したものゝやうに聞きます。

茲に一つ注意致すべきことは假名といふものゝ元の起りは假かりの名とも書きますし、假の字とも書きます、假字眞字と言つたのでありまして漢字を以て本體の字として假名は本體の文字を學ぶ爲の補助機關として現はれたのであります、補助機關として現れたにも拘らず更に重大なることは假名の分類をしたことである、五十音の字といふ「あ行」「い行」「う行」といふやうに母音の揃つたものをアイウエオ、カキクケコとしてちやんと整理して音の種類分をしてある、即ち吾日本人の頭に感じた所に據つて音の種類を分類した、而して此分類に終つて更に日本語の整理といふことが行はれまして、後に至つて眞淵、

宣長等の闡明しました如き日本の言葉の働き方を五十音に據つて整理したといふことは是亦偶然のものではない、日本語生來の性質に觸れて居るものである。そこで此五十音の中に又濁音なるものがありまして清音が濁音に變じる、さうして只今でも歌などを書きますには濁音を用ひませぬ、濁音を用ひなくも意味が通するのである、法律文、官報は總て濁音を用ひない、私個人の意見としましては今日に於て日本語の清濁の區別をせぬ書き方は非常なる缺點である、まるで意味の違つたことになる場合を生しる清音濁音の關係は日本語を書くに就ては重大な役目を有つて居るが、是非とも區別はしなければならぬ極くおかしな例でありますけれども、「長の間の霞の野邊の匂ひかな」とありましたら、「咽喉のが鳴る粕味噌の屁の匂ひかな」といふ讀方もあります、さういふまるで意味の違つたことになりまますから清音濁音といふことは、さうしても今日の日本語としては區別しなければならぬ。

餘り横道に入りましたやうですが、先刻のお話からしまして日本には此假名なるものがあつて、送假名からして初めて即ち五十音の發音式の文字を作つたといふことは非常に支那に優つた所以であつて、若しも日本に假名なるものなの微なかりせば今日或はまだ支那の状態にあつたかも知れませぬ、今日日本に於ては字を讀む者は90%以上である、支那に於ては90%以上は讀めない者である、之を以て見ても、支那人などがデモクラシーとかデモクラチツクガバーメントと言つて居るけれども、結局一二の文字の解る者の政治になつて、國民の意思を問うて政治をやるといふやうなことは出來ない、斯ういふ有様である、

更に進んで日本で用ひて居る所の文字は元假名は漢字から變形をしたものであるけれども、今度は變形無しに僅かの變化を用ひて歐米諸國は勿論世界一般に通ずる所の羅馬字を用ひて日本語を書くといふことを吾々が努めて居る、此運動が成功するならば諸君に字引を差上げれば何時でも日本語は讀める、さういふものにして日本語を廣げたいのである、諸君も御同意になれば吾々に力を添へてどうか互の理解をする、意思の理解、國民性の理解といふやうなことにつとめたいと思ふ、國家の理解はどうしても互に其國の文學を理解するにある、外國に行つて居りましても其國の新聞を讀むといふことは非常な苦痛であります、獨逸や佛蘭西に居りますと、ごうやら斯うやら毎日新聞を見まして今日はごういふことがあつたといふことが分ります。露西亞などに居りますと新聞は讀めず人と話が出来ぬとなると非常に困ります、平和會議に澤山の人が參りました、向ふへ行くと神經衰弱とか悲觀とかいふものが随分流行りましたが、さういふもの、多くは言葉の不十分から起る、外國人が日本に來ても不快を感じるの日本の事をこりや斯ういふ理窟だと理解の出来ぬからである。例へばごうも料理屋へ吩咐けても持つて來ないといふのは斯ういふ譯があつて斯ういふ事情が分りさへすれば、互に意思が通じて來る、それで吾々には羅馬字を以て日本語を書き之を國字にする事を主張する、是が出来さへすれば非常に結構なことでありますからごうか諸君もやつて呉れ」と云ふやうなことを言つてお茶を濁しました。

向ふでは御世辭を大變言つて面白い事を聽いた、是非さうありたいといふやうなことでありましたが

是は唯一節で或部分に向つては、商賣をするとか或は工業の競争があるとかいふ事情の方は、或る歐羅巴語を通して多少は解つて居りますけれども、國民の内情に觸れた所の状態、取分け日本人の精神とか氣風とかいふことは結局日本語を呑込んで貰はなければ徹底するものでない、其意味に於ても日本語を羅馬字で書くといふことを吾々としては非常に希望するものであります。

お話が少し長くなりますが、元々今使つて居る文字といふものは日本語に對して不自然なる文字を取入れた、日本人に相應しからざる文字を取入れた、御承知の如く日本語は語尾の變化を致します、「取り」「取る」「取れ」といふやうに語尾の變化を致す、其下へ以つて行つて「ぬ」とか「と」とか「に」とか變化を致す、何處までも言葉の國、さうして又言葉を誇として居つた所の國であります。そこで之を書き表すに漢字を用ひることになりますといふと、非常な無理が出来る、意味を探つて使はうと云ひますと、言葉の意味といふものは丁度こちらのものに、きちんと合つたのはありません。字引で引いて此意味と此意味と同意味のもので無い如く、一つの國の言葉と他の國の言葉と組合してびつちり合つた言葉は無い、凡そ似寄つたものを選び集めて居る、その中で或部分が共通の所がある、英語のコンモンセンスといふ字を探つて、コンモンといふ字もセンスといふ字も、日本語で常識と翻譯して居りますが、到底本當の意味は出て來ない、外の國の言葉では出て來ない、之と同じやうな譯で支那語は尙更である、日本でいふ「からず」は能はぬといふ言葉、例へば「可からず」と言ふことは今日の言葉で言ふと不可能といふ言葉

である、木の枝折るべからずと書いた所が、此枝が折れないといふのちや、何折れるぢやないかと言つて折つても構はぬことにもならぬことはない。こんなのは簡単なことでありますが、殊に當字あてを使ひましたものは非常に多いので、萬葉集の書方といふものは餘程苦勞しなければ讀めるやうになりませぬ、推量讀をする、あんなことで今日の事務を執つて行かうといふことは到底出来ない、そこで漢字を必要なる部分に用ひ働きを假名で書く假名交り文といふものが自然の結果として出來たのである、此假名交り文の中に漢字が這入つて居る、昔の萬葉式の讀方が盛に這入つて來る、人の名の讀方は大部分是である、又日本中の地名を字引無しで讀める人は殆どない。何々の命、兄エツケシ、弟オトツケシ、八十梟師ヤソツケルなどは今私が申したゞけを書いて見よと言つても容易に書けない、さう云ふ文字か公通の文字になつて居る、驚くべきことである。

普通教育を終つた者は第一に其國の法律命令を心得なければならぬ、所が小學校を終つたゞけの者は官報が讀めない、第一官報で讀めないものは名である、それから法律などでも新しい法律が出ると勝手な字を宛てゝ來る、それを平然として居る、是は歴代の文部大臣に私が申上げたことであります、今の大臣には會ふ時がありませんが、牧野さんの大臣の時も奥田君の時も高田君の時も申したのであります、文部大臣は此解決を一日も忽にすべきぢやないと思ふ、若しも今日の書物が必要であるならば、それを讀めるだけの國民教育を施さなければ國民教育が徹底しない、區役所の前に貼つてあるものが讀め

ない、それが國民教育、そんな國が何處へ行つたらありますか、能く往來が悪いか橋が壊れたとか電車が悪いとかいふことは言ひますが、思想の道路たる所の文字に對しては一向平氣である、思想の道路はもう泥だらけ、橋が壊れ石が轉がり逆も自動車は通りませぬ、文字の自動車や飛行機は何であるかといふと、電報だタイプライターだ活版だといふものがそれです、タイプライターは手で書く二倍もはやい、此原稿など皆私がタイプライターで叩いた、斯ういふ自動車は逆も今の石轉の道路では通れぬ、斯の如く思想の交通機關たる所の文字を構はずに書くといふことは如何にも其日暮しのやり方と言はなければなりません。理科教育でも何者でも總て是が根抵になつて居るものであります、私は飛行機の話をしていふと毎度言はれます度に、飛行機よりも國語羅馬字をやらなければ飛行機などは飛ばないと申します、斯ういふことを申しましたが、それは飛行機と言つても飛行機だけではいかない、第一發動機、發動機をやれと言ふと材料、材料をやれといふと今度は機械、製造場、悉く是か皆こんがらかつて到底國民の知識を上げなければならぬといふことに結局なつてしまふ、遺憾ながら歐羅巴なり亞米利加なりへ行つて見まして、我國の青年、先づ十五六歳、二十歳の者の知識程度と向ふのそれと較べて見ますと、其知識程度はそれは低い、誰が見ても公平な眼で吾々の知識の方がすつと低い、是でござうして細かい機械が扱へよう、さうして言扁人扁モンベニンゼンで虐められる、飛行機の機キの字は木扁ヘンである器ではいけない、さういふ文字をつかつてござうすれば飛行機は能くなる、羽をござうすれば宜いかなどと言ふのではいけない、さういふことが

ない、若い者の最も働く時間を言扁人扁で潰してしまふ、是程不經濟なことはない、國家に對して是程打撃はない、それで多少願を追ふやうに見ますと、今の文字をどうにかしなければならぬといふことは分ります。

それで眞面目に之を考へる人のものを對立して見ますと先づ三通りになります、第一は漢字節減、如何にも漢字は不便であるから漢字を節減する、第二は假名、第三は羅馬字、斯ういふ三通りになる、そこで斯ういふ忙がしい世の中でありますからそれを採る、結局はどうなるかといふことに識者の説が一定しましたならば、それに向つて着々進んで行かなければならぬ、第一の漢字節減であります、是は十年ばかり前でありましたが文部省に於て小學校の漢字を千字と節減してしまふ、所がどうもそれでは此字もない、あの字も無いといふことになつて、段々漁つて來ましてもう百字足せ、日本人が米を食つて居るのに千字の中に米といふ字がない、不都合だ米といふ字も足せといふので加へたさうであります、只今では千五六百ぐらゐる二千字近所になつて居りませう、然らば此二千字を以て悉く用が足りるかといふと、此五萬何千中漢字を使つて居る間は到底節減といふやうなことは出來ない、亞米利加で此頃禁酒法律を出したことは御承知の通りであります、是も随分馬鹿氣た論だとも見えます、殊に酒飲から見るとさうでありませうが、酒を節減するといふことは出來ぬが、斷然飲まぬといふことは出来る、もう一杯といふことになつて節酒はどうしても出來ぬ、煙草が其通りで節煙をして見る、日に五本とか十本

やるといふやうなことは容易に出来ることでない、斷然止めるといふことなら却て出来る、是は亞米利加のやうな非常な種々の人の込入つて居る所でありまして、酒にでも酔拂つて精神の状態を失つて居る者を見ますと禁酒といふことは無理は無いと感じます。漢字を節減した所が何か新しいことを翻譯して見たい、さうしますと此字が當つて居るといふことを感じますからそれを直ぐ持つて来る、それから詩人とか文士とかいふものは殊にさういふ癖がありましたして新しい文字を殊更出して人の注意を惹きたいといふことがある、或は又ペダンチックといふこともある、或は又昔の言葉を書經なり春秋なりから持つて來て出したいといふことになる、是は春秋にある言葉だといふので持つて来る、到底節減は行はれない、機械的に之をタイプライターを造る、御承知の通り三千字のタイプライターが出来て居りますそれがあつた爲にその中のを使へば外の字は使はないことになると言ひますけれども出來ませぬ、私も使つて見ました、私の居る役所に買はして自分でやつて見ましたが、是以ていけない、分らない字がそこへ出して来る、極く下らないヤスリ鋸ノコギリだとかかノコギリかといふ字でも平素は使はない、鑿ノミとかいふやうな大工道具の字のやうな六ヶしい字も出て来る、六ヶしい字は特別文字といふものがあつて引き出しの中にかくまつてある、其特別文字をピンセットで摘み出して臺の中に入替へて、それからボンと叩く、殆どタイプライターを使つた効能の無いまでに滑稽なものになる、結局漢字を使つて居る間は節減といふことは行はれない、又行はれたにした所が——非常に苦勞して行つた所が差當の應急手段であつて徹底的の手段で

はない、漢字を使ふならば漢字其ものをドン／＼使ふ、そこで先程申した通りアリストクラチックなものになる。

そこで今度は假名論になります、假名は日本人の發明しました所の手製の文字である、之を以て書いた物は昔からある、草双紙と言つたやうな女や子供の讀みます双紙がある、或は假名文字の伊勢物語とか枕の草紙とか源氏物語とか却々大きなものもあります、又歌集などといふものも可なりある、加茂眞淵の書きましたもの、中にも總て假名で書くといふ論がある、漢字の爲に苦勞する必要はない、日本は總て假名で書けばよい、平田篤胤などは盛にそんなことを言つて居たやうであります、それにも拘らず漢字と云ふものが、今日まで勢力を占めて來たといふことは、どうしても漢字が運んで居る所の思想支那思想、支那の文學々術、社會、宗教等の支那思想を表はす所の機關となつて何事も支那から取入れましたからであります。支那の教殊に儒教などといふものは日本の知識階級には大きい勢力を以て居りましたから、其等を尊重する意味から漢字を尊重するといふことになりました、精神上漢字に對する尊敬の意を棄てることは出來ない、吾々も昔は假名で書いた物は百姓町人の讀むもので、侍の讀むものでないといふことを教はりました、子供の時の話をするに假名で書いたもの即ちやつと小學校の生徒が讀むやうな假名交りの三國誌を二三頁讀んで見た、所が解るやうになつたならば親は一切假名で書いたものは禁するといふやうな状態でありました、何となれば假名で書いた物は讀易いから漢字が嫌にな

つて其方へ精が向かないから假名は一切禁する、夫から段々進みますと送假名でさへも下等なものとなる、下司張つたものであるといつて白文で総てかく、此氣風は段々／＼維新以來——御維新當時はま
だありましたが——薄らいで來て假名交といふことに漸く進歩を遂げた、けれども文體に至つては漢文
體で、多くのものは假名交りで書いたものを其儘漢文に直すことの出来るやうになつて居ります、斯う
いふことから漢字といふものに對しての尊敬心があつて、假名はどうしても卑められるやうである、故
に假名だけのものは進まないといふことが一つある、是は一の大なる原因であると思ひます。

次には假名自身が不完全なことである、假名で書きましたものはどうしも拾ひ讀の質たちになつて來る、
先に申します通り假名それ自身の歴史が補助機關として生れ出たものである、詰り漢字の家來であるか
ら、家來の身分を以て主人公の役をさせようとしても、どうしても主人公の品が出て來ない、是は自然
の勢である、何處までも補助機關の性質を帯びて居る、形からさうである、成るべく單純にしてある、
之を主人に使ふといふことは詰り小僧を主人に使ふと同じことで、どうしても感覺ニエステチツク
ニが行はれ難い、然らば其假名を今の形を改めて、形が悪から形をもう少し改良して、羽織でも著せ
て出さうと言ひました所が、又第二の缺點がある。

假名それ自身が足らない、日本語の單純なる昔の言葉だけを現はして用が足る時代ならば假名で十分
間に合つたかも知れないが、言葉自身が變化して來ますと所謂拗音が出ます、拗音といふものは漢音に

ばかり附いたものと考へることは間違つたもので、『それは』といふ代りに『そりや』といふ、『それでは』といふことを『それぢや』といふことになり、さういふ拗音を表はす爲には假名では足りない、そこで假名を二つ乃至三つものを結付けて、其中の一部分づゝを取つて使ふ、醫者といふ時に『いしや』と書いて『しや』を約めて『しや』といふ、吉祥寺といふと『じやう』と書いて『じよう』と讀むといふやうなことになる、一つくで讀めば『き』とか『く』とかいふ風に簡單に讀めばこそ便利であります、さういふ風に音を表はす機關としますと餘り固まり過ぎて、賣藥を買つて來て二種類位一緒にして飲むやうなものがあります、藥の原素を此處に曹達なり鹽酸なり並べて置いて適當に盛つてやるといふ代りに、既に調合した母音と子音が結付いた丸藥なり散藥なりが出來て居る、それを買つて來て二種も三種も混ぜてやるといふやうな臆劫な仕方である、之を避ける爲には賣藥の數を澤山作らなければならぬ、假名の數を百なり二百なりに増してやる、さうすれば其缺點は補ふ、さうしますと形の不完全な所も形狀を改め、音の足らぬ拗音の記號を澤山作り、さうしてやれば假名だけで澤山である出來るぢやないかと云ふ論もありますが、折角斯の如く改良に苦勞した所で第三の問題が出て來ますし、是はどうしても假名では通り越せぬ。

其第三の難關は何であるかといふと其使用範圍であります、其使はれる範圍は如何に改良しても日本國內、精々臺灣朝鮮に使ふことは出來るかも知れぬが、先づ長崎を越えて支那に行くともう假名は通用

しない、況んや香港印度をや、さういふ範圍の限られた文字で、世界共通の言葉の奥に居る所の思想を傳へる機關とすることは甚だ不得策なことである、茲に於て羅馬字といふ論が出て來ます。

羅馬字ならば此處から大阪へ電報を打ちましても其人は上海へ行つた、上海へ電報を打つてやります甲谷陀に行つたと云へば甲谷陀まで電報が續く、葉書を書いてやつても何處までも續く、羅馬字にも他のものと同じく種々缺點がありますが、それにも拘らず吾々が羅馬字を主張するといふのは、一は世界共通のものである、日本から乗出して何處へ行つた所で鞆の上に羅馬字が書いてあれば忘れても届いて來る、假名や漢字で書いてあつては容易なことではありませぬ、商賣上の用を足す電報をかける、是も何處へでも行く、巴里會議などで外務省陸海軍等から殆ど毎日のやうに電報を出す、新聞記者等も其通りである、悉く羅馬字の電報である、而も日本語でやつてゐる、然るに何故是が日用には使へないかといふ問題になります、振假名の問題などは措きまして、是が使へないといふ——何故羅馬字が一般に行はれぬといふことに就ては是亦多少遡つて見る必要がありますが、行はるゝことは或部分には立派に行はれて居る、ゼジュイット即ち耶蘇教の昔の葡萄牙の宣教師が來た時の羅馬字で書いた日本語の書物がまだ残つて居ります、それに依つて書いた所の島津某氏の書いたものがある、それから平家物語を書いたものが一篇あります、これを今故人となりました矢田部博士が何處からか出して來て新聞に出したとがあります、此書方は葡萄牙式でQとかXとかいふ書方の入つたのであるが、讀めないことはない、

讀めるやうになつて居ります、それが極く小部分ならではいかなかつたのでありますが、それから廣がりましたのは和蘭人の貿易が始まりました、長崎に和蘭の色々な人が來たのに教へたからであります、其頃書いたのは和蘭の書方を以て日本語を書いたのである、高野長英などの書きましたのは和蘭式で長英とは *Tj a i E I* とかくのであります。それから亞米利加英吉利と交際をするやうになりましたから横濱に來ました宣教師で、米國人のヘブロンといふ人が日本語の英語字引を作つた、それには英吉利式の羅馬字を用ひましたのでこれが今日の所謂ヘボン式書方であります、停車場などに名前の書いてあるものは多くヘボン式を使つて居ります、それで先づ是までも三通りの書方があつて、之を日本で普通に用ひなかつたのは、當時にあつては無論普通に羅馬字を用ひるといふことは夢にも考へませぬ、唯だ外國人が日本語を便宜の爲に書いて居るといふに過ぎませんでしたからです。處で日本人の使ふ普通文字として羅馬字を使はうといふ運動を起しましたのは明治十六年から十七年と思つて居ります、羅馬字會なるものを起しまして、其時には外山博士、矢田部などといふ人が大分中心人物でありまして、英吉利人亞米利加人などがそれに加盟を致しまして隨分盛なものでありました、當時を振り返つて見ますと條約改正といふことが非常に大きい問題になつて居りまして、領事裁判、治外法權といふものゝ中に吾々の居ることは獨立國民として忍び難い所の恥辱であるから、どうにかして此治外法權を改正しなければならぬ、それには外國人が日本を理解する機會を與へなければならぬといふので、總ての社會改良とい

ふ問題が此頃唱へられました、東髪會などいふのがあつて婦人方は東髪をやる、油をつけて丸髻姿などは不經濟であるとか、また色々な會があつて東髪を勵行したことがあります、それから踊も踊らなければならぬといふので是も女學校から始め踊を盛にやる、悪い方から言ふと外國崇拜といふやうなことでありましたが、それに次で羅馬字を用ひ文字は皆羅馬字にしてしまふといふ運動が起りました、愈々羅馬字を使ふに就ては書方を定めなければならぬ、それ迄には既にヘブロンを書きました辞書もある、會話書等もあるにも拘らず書方取調委員といふものが會の中に出來ました、外國人と日本人と可なりの數よりなる委員會が出來ました。今の大學總長山川さん天文臺長の寺尾さんなどが委員でありました、それから巖谷小波さんの兄さんなどもさうであつたと思ふ、さういふ人達から委員が出、それから外國人側ではプリンクリーとかチェンペリン其他の宣教師が這入りまして、羅馬字を日本語に用ふるに就ては書方を統一しなければならぬといふことでありました、其時に寺尾君の出された書方の動機は今日世間で日本式と稱へて居る所の書方、即ち五十音に對して一つづゝの子音を用ひる、さうして濁音については子音の濁音はd、sの濁音はzといふやうに定めたのであります。拗音等の濁音に於ても皆子音の濁音によりて拗音の濁音をつくる、要するに五十音のシステムといふ工合でやつた、之を寺尾さんが書かれ私も其時に拜見しました、委員會に於て大分外國人側と日本人側との間に議論があつたさうでありまして、投票に依つて之を決したのであります。が僅の多數でヘブロン式といふことになつたと聞きました

た、詰り日本人の委員の内の數名の人が外國人側のヘボン式を賛成せられた爲に、ヘボン式を使はうといふことで、此式によりて書いた其當時の雜誌があります、此雜誌が何處かに行けば残つて居りませうが、茲で注意することはヘボン式も其まゝではいかぬといふことは矢張英吉利人側に於ても認めたことでありませう、此拗音の書方に東京を「トウキョウ」といふやうにYで書かず「トキオ」とIで書く書方がある、日本では「トウキョウ」と云ふことゝ「トキオ」といふことを區別する、それであるから「キョウ」といふ時にはYを書く、今日東京といふのにIを附けて居るのは其時から始まつたのであります。Tokyo「トウキョウ」と讀む、同じく「ギョウ」とか「ニョウ」といふ風なものはYを附ける、尤も『シャ、シユ、シヨ』は一吋ヘボン式を使つてshを用ゐますから日本式とは違ひますが、外の『ヒヤ』といふ時には *hya* 百でなく非役と云ふ時には *hiza* といふやうに區別をするやうに拗音の書方だけは當時の寺尾式を採用しまして進んだのであります。

所で斯の如き大運動になりますといふと、結局日本將來の國字を定めるのである、今是だけの外國人と日本人とが寄つて、そこで總ての頭數を勘定したので可否を定めるべきものか、もつと考へる餘地は無いかといふ議論も出まして、それで書方再調査を希望するといふことを翌年の年會に出しました、丁度虎の門の今の女學館になつて居ります所のあれが工部大學でありました、彼處の大講堂で年會を開きました時に書方調査委員を更に命じて書方の再調査をしようといふので随分人が出ました、先頃亡く

なられた井上侯爵が其時は外務大臣で出て来て演説をされました、英吉利大使の演説もありまして盛な會でありましたが、其場で議論を戦はせました、歴々の方の御演説を伺ふ時が澤山あるし、議論は半にして終結投票といふことになりました、起立に依つて再考といふことは廢めたのであります、再考は成立たなかつた、敗北した、其時も動議は詰り羅馬字を日本語に使ふには『全然之を日本文字として敢て外國の用法に拘泥せざること』といふことが第一にあつたと思ひます、右の趣旨に基いて書方を再調査して呉れ、斯ういふことであります、一寸説明しますが敢て外國の用法に拘泥せざること、いふのは羅馬字の用ひ方といふものは文字は普通ではありますけれども、實は悉く音は色澤いろつやを表はすといふことは二十六字では届かぬ、でありますから英吉利は英吉利固有の讀方、佛蘭西は佛蘭西、獨逸は獨逸、伊太利は伊太利、皆相應に讀方を變形しまして之を用ひるのであります。今日持つて來ようと思ひましたけれども忘れて來ましたが、それで發音主義とか語源主義とかいふことは別問題であります、大體に於て此日本式も昔の假名遣には拘泥しない、併ながら羅馬字を日本文字として使ふ、斯ういふ主義である、例へば「チャ」などはtiで彙に申しました日本語の立場として「立ち、立つ、立て」といふことは「取り、取る、取れ」といふこと、殆んど同じ意義に頭の中では通用して居るから「チ」は總てti「シ」もSiといふやうな方針であつたのであります、此主義は今日になりましても英吉利のスペリングレホームといふ方でやつて居る、今日は戦後經營として英國でも英語の書方改良が盛に教育會で論せられて居ります、

刷物を一冊貫つて來まして御覽に入れようと思つて居りましたが忘れて來ました、それに依りましても英吉利の多年の經驗で新しい字を入れたり色々なことをしては到底通らぬ、どうしても英吉利固有の讀方をする、¹の長いライキとかナイトとかいふのは英吉利では²を使つて居ります、さういふやうにしてサイレントの文字を除くといふので書方改良が出來た。

日本式と言ふ今の書方もそれです、日本國固有のドレランスを用ひなければならぬといふ方針でやりました、さういふ時分には此論は破れたのであります、破れは致しましたが之には理由がありました、運動の仕方も動議者は幼稚でありまして知らなかつたのも一因ですが、片方では古い先生方は、運動方も上手でありまして、書方改良動議が出來たから何れ多數を以て決するから出て來て反對しろといふやうな手紙を廻して澤山の人が來まして詰り動議を潰されたのであります。併し是だけではまだ日本式主張者は治まらない、そこで一部の人は退會を致しまして、別に羅馬字新誌なる雜誌を發行致しまして日本式を行つて居りました、斯うして兩方立つて居りましたが、此間私は留學しまして日本に居りませぬでしたが直様兩方共立消の姿となつたのであります。といふのは一方は羅馬字をやれば直ぐ効果が見られるといふやうな即効式で、地方の郡長とか村長とかいふものに這入れ〜と言つて勧めたので會員の數が七千から集つたかと思ひます。さういふものはバラ〜片つ端から出てしまふ、片つ方の羅馬字新誌は其時の貧乏書生が多かつたので資本が續かない、それで潰れて居りまして羅馬字運動といふこと

は一寸火の消えた形になつて居りましたが、是が一九〇〇年即ち今世紀の初になりましたから文部省に羅馬字の調査委員、此時に委員になられた方が居られます、其委員が出まして調査したのであります、之にはヘボン式と日本式の折衷案やうなものが出まして、其調査委員の推薦した所のものが官報にも出ましたが、一向この文部式は行はれない、斯ういふものは結局一片の布告を以て行はれるといふ譯にはいかぬものと見えます。そこで其次に羅馬字につきて出て來ました所の運動は、日露戦争後戦後經營としまして今度こそは羅馬字を以て大に國語の改良を圖り、どうしても之をやらなければならぬといふので起りました、只今の『羅馬字ひろめ會』であります。

是はその名稱の示す如く羅馬字を廣める、初めの起りは書方は議論しない、書方はどうでも宜いから先づ羅馬字といふ大なる題目の下に這入つて呉れといふので羅馬字ひろめ會を起しました、今も残つて居ります、西園寺さんを會長に選び、林伯爵が選ばれて副會長といふことで暫くの間雑誌を出しました之には今の新式の書方プロポーゼと外に種々雑多な式が現はれました、そこで今度は多數の議論も出たから是から統一にかゝらうといふので書方統一委員が出來ました時に矢張此二つのヘボン式日本式の重な流派が、どうしても一緒になることをやらない、片方は日本語の性質上から主張して羅馬字を日本化した羅馬字にして用ひよう、片方は英吉利人が日本語の口眞似をして居るのを眞似して英吉利人に讀み易いやうといふのであるから主義に於て通らない、一致する譯はないので、結局色々な經緯が其間に

あつて二つに分れました、只今では日本の羅馬字社と羅馬字弘め會といふものと二つ立つて居ります、日本の羅馬字社は餘りプロバガンダを遣りませぬから世間に餘り知られて居りませぬが、併ながらそれ相應の力を盡しまして意想外の好績を擧げて居るのであります。尤も私は日本式の羅馬字の主張者でありますが故に、私の申すのは日本式の賛成者側の方を主として申すのであります、此二つあるといふことは甚だ不利益なことであり、書方などは是が行はれてから後に徐々に直しても宜いぢやないかといふ大局から見た所の論も無いではございませぬ、無論是はさうありたいこととございませぬ、併しながら此處が大切な所であつて、今まで羅馬字の用ひ方は外國人が日本語を學ぶ爲の羅馬字の使ひ方が主になつてゐる、今度は日本人が羅馬字を使はうといふ立場に腹を据ゑなければならぬ、一旦決めたといふと容易に之を改良するのは六ヶしいことは、亞米利加でルーズヴェルトが大統領のときその盛なる勢力を以て、さうして僅に二百字ばかりの綴方を變へようとした、スペルキングを變へようとしたけれども容易にそれが行はれない、此書方が一旦沁み込んで教科書にも使ふやうになると非常な困難になるに違ひない、今日鐵道の方に於ても狹軌鐵道廣軌鐵道といふので惱んで居るが、不幸にして吾々先輩が狹軌鐵道を探りましたので、之を廣軌鐵道に直すといふことは非常な困難でありまして、經濟上技術上事務上色々な困難が其處に挿まつて居りまして容易に出來ない、之を初めから廣軌鐵道に將來するといふ腹をやつて居りさへすれば、停車場の計畫、橋の土臺の作り方から墜道の掘方まで初めからやつて置きます

と何でもなかつたのであります、今日の國字問題に於て羅馬字を用ふるといふことに就ては羅馬字の用式即ち軌道を決めるといふことは一番大切なことである、軌道をしつかり定めなければならぬ、それに就ては吾々は十分に骨折りました日本語の性質、書方、詞の切方等の研究をやつた積でありまして、之を以て進まうと思ふのであります、で此日本式に對する非難は發音がぬといふのをツと讀むとか、*si*をシと讀むとかいふやうな發音に反對するのが主なる點でありまして、其外何もない、是は根本問題からして羅馬字といふものは左様に發音を正しく現はすものでないといふこと、それから發音を表はすだけが文字の役目でないといふこと、之を考へれば直に合點が行く、發音を表はすだけが文字の役目でない、言葉を表はさなければならぬ、言葉を表はすといふことになれば言葉の働を表はして一目して其言葉を讀めるやうにしなければならぬ、管に其發音の響いたものを真似するといふだけでは地方に依つては變ります、人の年齢に依つては變ります、それで發音を正確にする事はさう必要なものでない、それよりは國語を現はすもの、言葉を表すものとしての羅馬字を研究しなければならぬ。此點よりしますれば吾々の主張はヘボン式よりは遙に優つて居ると吾々は信するのであります、又外國人に對しても外國人が日本語を讀む爲に文法の簡單なることを要する、文法の簡單なることは日本式に於ては凡そ他の半分で済むこと、思ひます、この文法の簡單なることは日本人自身も早く日本語に親むに非常に手掛が宜いといふことになる、又日本の文字が將來若し何處でも讀まれるやうになりますと、讀む者の方が書

く者より遙に多いに違ひない、さうすれば讀む者の便宜を圖つて置けば其方がすつと宜い譯である、日本式ではシは*si*で少し鋭くなつて居る、是だけの規則で濟む、*chi*の如きは全く英吉利固有で *chi* では日本語には箝らぬ、佛蘭西に行けばシに讀むし、伊太利ではキになる、これと反對に日本式は萬國的性质になる書方である、ヘボン式書方は萬國的性质の變へたる書方である、そこで主張は幾らもありまして詰り日本の國字論といふものに田九博士が詳しく書いてありますから、若し必要のある方はそれに就て一覽を願ふのであります、日本式の只今までの景氣は見込はごだけ進んだかと申しますと、今日電報は大抵日本式を使つて居る、外務省ではチは*ti*シは*si*ツは*tu*を使つて居る、即ち外務省の公文は日本式を使つて居るのであります。それから參謀本部の萬國地圖、即ち萬國寄つて各國の地圖が續き合ふやうに拵へたもの、是は全部日本式を使ふ、それから氣象台の報告は全部日本式を使つて居る、さういふ工合に日本式といふものは公の官署から認められて既に使はれるやうになつて來ました、それから亞米利加式加奈陀で出て居ります所の雜誌で、日本人は兎角日本語を忘れて困る、日本の文字までも忘れまいといふことは出來ないが言葉は自由に話せるやうにしたいといふので、それで矢張日本語の雜誌を出して居ります、さかひや境澤といふ人が主幹でやつて居りますが日本式を用ひて居る、此頃少し改めて日本式に境澤式が少し這入りましたが、大体日本式を用ひて居る、斯様な譯で吾々の決めんとする所の廣軌鐵道の軌道は稍々社會に端緒を現はして來たと吾々は信するのであります。それで吾々の如き微力の者

が之を廣めやうとするにはどうしても固く仕事を進めなければならぬ、固く進めるには第一に書方、文法の研究を怠つてはならぬ、何人が考へて見ても右左から議論をして落付く所は矢張其處へ來るといふやうな書方を研究しなければならぬ。それから日本の羅馬字社では雜誌も出して居る、子供の雜誌などを出したことがある、然し兎角羅馬字は子供のものである、子供が學校を出れば更に漢字を習ひ始めるといふことになつては、何時まで経つても子供の玩弄物になつてしまふ、だから立派なものを出さうといふので、羅馬字の本を出さう、外國人にも示す世界的の出版物を出さう、其専門の人に書いて貰はう、是は六ヶしい注文で、羅馬字に熱心であり一方の學問に於ても世界的に書いて出さうといふ人であるから一寸打突かり様はない、幸にして三つ程是が集りまして、一つは池野博士の實驗遺傳學といふ本を羅馬字で書きました、是は自分の學説もあり、又合せて他の人の説も纏めて殆ど實驗遺傳學に於ては是だけ纏つたものは無いといふ位のものである、是は幸にして専門學校の教科書になつて居りまして、今日では第三版まで出ました、さうして羅馬字社の一つの歳入になつて居ります、一年に三四百圓づゝの歳入になります、もう一つは寺田博士の書きました海の物理學で已に二版になつて居ります、日本は海の國でありますから、生徒が教科書に之を使つて居る、札幌の大學あたりでも教科書になつて居ります、もう一つは田丸博士の振動運動の専門の書で、振動といふ本である、是も需要がありまして、各工業學校で用ひて居ります、是は今本が賣切になつて出版中になつて居りますが第二版になります。大体右は吾

吾の羅馬字運動の結果であります、若し御賛同があれば諸君の御賛成を得たいのであります。

終に臨みまして言葉に就ての論が色々ありますが、一つの論者は斯ういふのであります、言葉の爲に人間の苦勞することは夥しい、況んや文字をや、漢字の爲に人間の働く有用なる時間を三年なり五年なり潰すといふことは非常に國力を消耗することである、然らば此際思切つて昔漢文をやつたやうな譯で英語なり佛蘭西語なりを採るか或はエスペランドを採る方が宜からう、それが進んだ方法ぢやないかとこれはもう私共百も考へたのであります、それに對する私の答は言語統一——は人間の統一が出来た時には行くであらう、人種問題、人種が皆雜婚して一つの人種になれば言葉も一つになるかも知れない、それまでは到底行きませぬ、それは目の前に證據がある、白耳義といふ國、今度勇敢に戦つた白耳義倫敦の人口よりも少い白耳義の八百萬の國民はフラマン語と佛蘭西語と二つ持つて居る、何處の役所へ行つてもフラマン語と佛蘭西語と二様書いてある、是位の國で言葉の二つあるは非常に不都合であるからフラマン語を廢しよう、佛蘭西語の方が多くて政權を握つて居る方であるからフラマン語を廢さうとしてもどうしても廢せない、色々苦勞するけれどもどうしても廢めぬ、廢めぬ所は何にかといふとフラマンの文學にある、フラマンといふものは却々棄つべからざるものである、食物着物は無くしても然し例へば人麿の歌であるとか馬琴の書いたものであるとかいふものは、どうしても耳の底に残つて棄てられない、リテラチユアを潰さなければならぬ、秦の始皇帝の二の舞をやらなければならぬ、と

うく、フラマン語のリテラチュアを燒潰したけれ共いかない、國語を潰すなどは以ての外で、國語は或點に於ては命以上に貴いものである、吾々の祖先の言つたことが今迄残つて居る、瑞西といふ國は御承知の通り人口は僅か三百萬ばかりしかないが、國語を四つ使つて居る、伊太利語に佛蘭西語に獨逸語に羅馬尼語、議會では伊太利語、獨逸語、佛蘭西語、どれも勝手に話して宜いといふことになつて居る今日のやうに民族尊重といふことが出て來た以上は尙更國語を打潰して自分の持つて居らぬ國語を之を使へといふやうなことは到底出來るものではない。吾々の固有の日本語といふものは何處までも尊重して發達せしむることは民族發展上に大切なる問題である、そこで文字を棄てるといふことは國語を棄てるといふことは丸で違つたことで、漢字を棄てるといふことは却つて國語を好くする問題である。今までは不自然な隣の着物を借りて來たゞけである、元に立戻つて今度は羅馬字といふ洋服を着て働かうといふのであります、總ての改革に對しては固より犠牲は無くちやならぬ、所が此犠牲者たる活版屋さん、墨屋硯屋等が商賣が困ると言つたやうな物質的のことは云ふに足らず何んでもありませんが、精神上的の犠牲といふことは一番難しい問題である、有名な書家の書いた書物とか書家でなくとも祖先の書いた書物だとか手紙だとかいふものが残つて居つて、それをもう身代を潰しても離せないといふものがある、さういふものは無論是は殘して置く、さういふものを吾々の子孫が分らなくなるだらう、もうそれだけで羅馬字は厭になるといふ人がある、あなた方にもあるかも知りませぬが、羅馬字を使つて子供が是が讀

めなくなると思ふであらうが、それは羅馬字を用ふるといふことと漢字を使ふといふことは二つの別のものである、漢字と羅馬字と並べ行はせる、是は歐羅巴で今希臘語拉伯語をやつて居ると同じである、漢字漢字といふが今でも、あなたは漢文で書きますかといふと逆も出來ない、兎に角漢字を全廢するといふことは別問題である、佛蘭西人が此頃書きましたルジャボンといふ本があります、其中に丁度日本の文字の所が一項ありましたが、それを見ると日本の假名といふものがあります、一つの假名に對して平均十六種の記號がある、萬葉假名を皆寄せたら其位ある、あの字でも阿の字も書く安いといふ字も書く、片假名もある、又七字いろはといふのがあつて私其子供の時七通習ひました、それを色々統計的に集めて十六通りの書方を表はして居る、ところが其十六通りに唯だ一つ羅馬假名(羅馬字といつてはいかぬから)とか新假名とかいふ假名が一つ殖える、十六分の一即ち六パーセントばかり假字を覺えることが殖えるだけである、さうして此用ひ方は吾々の經驗に依れば平均十五時間にして出來る、三十分位カキクケコの記號は是れ、タチツテトの記號は是れといふことを一回二回重ねて行つて十五時間あれば出來る、漢字なら十五年かゝるものはそれで終つてしまふ。

さういふ經濟的書方である、が但し經濟的だけではいかない、精神上的の犠牲は甚だ太なるものがある、殊に忘れてはならぬことは吾々が書かといふものに對する趣味は或意味に於ては繪などを見るよりはもつと強い意味を持つて居る、書といふものに對しては之を英吉利人などの頭に入れるのは甚だ

むづかしい、何だそんな物に珍重がつて金を掛けてと言つたやうなものである、そこで音楽といふもの
唯お話ただけでは意味は足らない、昔の野蠻人できへ唯言つただけでは意を盡さぬから大きな聲をし
て叫ぶ、之に節を附けてそれを歌ひ出すといふと又非常な精神に通る方が違つて来る、即ち音楽などこ
いふものはそれである、たゞ一つの言葉でも音楽の節を附けて耳に通した通り方は餘程頭に響く、それ
と同じことに筆勢筆意に依つて現はした趣味は殆ど音楽で歌つた詞のやうな意味を以て吾々は迎へて居
る、吾々はえらい諸大家の書いた書などを持つて居りますから、是は容易に拔去ることは出来ない、文
字を改良することは改良することがさういふ書いたものは何時までも残つても宜い、能狂言などには變
つた装をする、神主さんなどは烏帽子を冠つて色々な齋服を著ますけれども、あんな風をして戦をする
ことも出来なければ用足も出来ぬ。用足の日用使ふものと高等教育の精神娛樂に供することは區別し
なければならぬ、今日の事務をやる爲にはそれと區別しなければならぬ。

そこで唯便宜な都合のよいだけではなかく通らぬ、明治の御維新をするのに御維新にして政府を統
一すれば行政費が少くなるといふことは誰も言はなかつた、唯だ理窟上日本は一統の天子を戴いて國
家を建てなければならぬ、萬機公論に決する、正義人道を以て國を立てなければならぬといふやうなこ
とを 明治天皇は仰せられた、それに對して吾々の祖父や親父は色々な總ての犠牲を拂つて今日の世を
築き上げたのである、今日の文字の改良といふことに對しても、前途の理想たる目的がなければならぬ、

理想たる目的は何のであるかといふと日本語といふもの、國民生命の泉たる所の日本語そのものを完備して、世界に堂々と日本語を出すといふことにならなければならぬ、歐洲で吾々が色々な會議に出て喋舌らなかつたとかいつて新聞が攻撃して居りました、日の丸の旗は出しますけれども、日本語といふものを字引を引いて御讀みなさい」でなくては、日本といふものは世界に顔出しが出来ない、之をやるには世界共通の文字でなければいけない、皆洋服を着て居る中を羽織を着て歩けば珍しがられるけれども實はいけない、幸に日本の言葉は支那語と違つて羅馬字で何事を書表すにも差支ない、今までの經驗によればさうである、今日日本で學び教へる總て高尚な學問は羅馬字で書いて差支ない、その羅馬字を完成して益々整備に整備せしめて教育の機關を完備する、さうして世界的に日本語を發達させたいのであります、今日外國と手紙の遣り取りをしても却々日本人は筆が重い、手紙の返事が遅くて困るといふことを聽く、何故かといふと能く分つて居る、碌づつば書けない、書くど誰かに見て貰はなければをかした所が出て来る、私共子供から英語を習ひましたから英語なら出て来るが、佛蘭西語、獨逸語などは向ふでは世事を振り撒いて能く出来て居る杯ともいふけれども、自分でひやりと思ふことが續々ある、之を日本語でタイプライターで叩いて御申越の次第云々と云ふやうにやつて行くと腹が空く、それでなければ日本人の發展は出来ない、向ふから来ることは宜しい、字引を引張つて讀む、皆英佛獨の附合がそれである、こちらからやる時はこちらの言葉でやる、それが情無いことには英吉利人に對しては英吉利語

獨逸人に對しては獨逸語、佛蘭西人に對しては佛蘭西語といふことになつて居る、さういふ獨立國では殆ど獨立國の體面を没却してしまふ、それでどうしても日本語といふものを世界に出さなければならぬ之に向つて奮闘して行かなければ日本の商賣も工業も政治も外交も振ふ時機はないと思ふ、飛行機の飛ばないのは無論のこと學問の飛ばないのも無論のことである、此爲に吾々は羅馬字を以て一日も早く日本語を整理したいといふ努力を致して居るのであります、甚だ詰らぬことを長々しくお話致しました。

馬市の秣飛び散る春の風

漱石

こゝかしこ蛙鳴く江の星の數

其角

手燭して庭ふむ人や春惜む

蕪村

會 員 來 信

本會紀要第十六卷一二四頁の安藤政次君といふ項目の氏名が小生を意

味するものでしたら該項目下の言説は小生の全く關知しないところで

甚迷惑を感じますから御手数ながら御取消を願ひます尤も安藤政次と

いふ方が別に御いでならばこれは問題にはなりませんか………

安 藤 政 次

財團法人明治聖徳記念學會御中